



TITLE:

2)「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔大学院GP〕採択：臨床的方法としての「めぐる」ことに関する体験的研究

AUTHOR(S):

山本, 有恵; 皆藤, 章; 千秋, 佳世; 古川, 裕之

CITATION:

山本, 有恵 ...[et al]. 2) 「研究開発コロキウム」報告（要約版）：〔大学院GP〕採択：臨床的方法としての「めぐる」ことに関する体験的研究. 研究開発コロキウム：平成20年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) 2009: 54-55

ISSUE DATE:

2009-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/143114>

RIGHT:

臨床的方法としての「めぐる」ことに関する体験的研究

A Study on “Around-ness” for a Clinical technique

研究代表者 山本 有恵 (D3)

教員 皆藤 章

研究分担者 千秋 佳世 (D3)

古川 裕之 (D1)

〔研究目的〕

本研究は、心理臨床学の研究の実際に於いて、本来的に対象化や表象が不可能と考えられるテーマを研究するにあたって、「めぐる」ということの方法的可能性を体験的に検討・考察しようとするものである。

昨年度は「魂」をテーマとして「魂をめぐるフィールドワーク」を行なうべく、「魂」ということが日常性として根付く土地に出かけ、その土地の日常性を生きようとする試みを持った。実際にフィールドとなった波照間島では、数々のアクシデントに見舞われながら、「何もわからない」者として土地にいることを余儀なくされ、そこにおいて「引き受けるしかない」というありようで発揮される主体性ということを考察した。また、このような主体性は、心理臨床面接においてクライアントに「何もわからない」ところから出会っていくしかない心理臨床家の体験に通じるものがあるのではないかとの示唆が得られた。

二年目となる本年度は、昨年度も行った波照間島フィールドワークを継続して行い、そこからの体験的考察を行っていくと共に、民俗学者宮本常一の文献講読を行って、そのフィールドワークのありようを検討し、フィールドワークから如何にして臨床の知の創出が可能になるかを論考していくことを目的とした。

〔研究経過〕

今年度は、まず昨年度の研究のふりかえりから始め、昨年度のフィールドワークやディスカッションから考えられた「めぐる」ことの〈方法〉的可能性を考察した。また、昨年度と対照して波照間島の非日常性に着目するべく、豊年祭ムシャーマの行なわれる8月14日を中心として、8月11日から18日にかけて、山本と古川の二名によるフィールドワークを行なった。これについては昨年同様に「日記」という形式での報告文を作成し、そこに見られた記述から「めぐる」ことについて検討した。

また、フィールドワーク終了後には、民俗学者・宮本常一の文献購読を行い、その「フィールド」に対する姿勢などについて考え、本研究におけるフィールドワークのありようと対照しつつ、フィールドワークということの方法的性質についても考察した。

〔研究成果〕

昨年度のふりかえりから捉えなおされたのは、「めぐる」ことにおける「主体性の喪失」の体験からもたらされる「引き受けるということにおいて発揮される主体性」であり、また、「出会いの主体的相対性」ということであった。特に後者は、フィールドワークから時間を置いて立ち頭われてきた「出会われてしまう」体験への着目から見出された、「出会いの主体としての他者」に着目するまなざしであり、出会いにおいて「わたし」が主体性の喪失を引き受けることを基盤として生じる相対性であり、「相対する」ことを可能にすると考えられた。

さらに宮本常一の記述を検討して、宮本の民俗学、あるいはフィールドワークにおいては「人に会う」という体験と実践から、得られた情報の「比較・検討」や「論考」をするのではなく、あくまでその体験の最中において純粹に「耳を傾ける」こと、そしてそこで目に映る人間の生きようとする姿を「記述」しようとする姿勢が見て取られた。

また、宮本がフィールドワークという方法の持つ、人間一人一人の「生きる」ことへのまなざしを研ぎ澄ます可能性に自覚的であった可能性の指摘から、そのような自覚においてフィールドワークが如何なる方法的可能性を持つか、という点が体験的研究として考察された。

波照間島フィールドワークでは、昨年度の「何もわからない」者、「異人（マレビト）」としての実感を突きつけられるような体験からの大きな変化として、「他者の日常性」と自身の日常性を対照するようなことが可能になっていたり、或いは島に暮らす人との「関係」が生じていることが不可避的に実感されたりといったことがあり、そこにおいて「他者の日常性」に「臨む」ようなありようが生じ始めていたと考えられた。

また、そのような変化が生じてきた過程に着目し、本研究の主眼とした「めぐる」ことの持つ「過程生成力」に着目して、「めぐる」ということが、主体性の喪失を引き受けるような主体性の発揮から、他者という主体、他者の日常性が立ち頭われることを可能にし、そのような出会いの過程を生成していく〈方法〉たり得るのではないかと考えられた。

このような体験が、イメージの次元で生々しく生きられるとき、それは心理臨床の実践における体験に通ずるものがあり、「めぐる」とは、その可能性に自覚的である臨床家が、「主体性の喪失」を引き受けることによって、結果として過程を生成し、臨床の知を創出していく〈方法〉たり得ると考えられた。